

# 令和 4 年度第 2 回彦根市文化観光推進協議会 会議録

## 令和4年度第2回彦根市文化観光推進協議会

第1 開催日時 令和5年3月29日(水) 午前9時30分から午前11時00分まで

第2 開催場所 彦根市役所 5階 会議室5-3

第3 出席者 出席委員

滋賀大学 産学公連携推進機構 特任教授	上田 雄三郎
滋賀県立大学 地域共生センター 講師	上田 洋平
彦根観光協会 専務理事	矢田 全利
ひこね文化デザインフォーラム 理事長	戸所 岩雄
近江ツーリズムボード	内記 真美
彦根市産業部長	中村 武浩
彦根市歴史まちづくり部長	久保 達彦

(欠席委員)

彦根商工会議所 副会頭	上田 健一郎
彦根市都市建設部長	藤原 弘
彦根市教育委員会教育部長	広瀬 清隆
彦根城運営管理センター 所長	宮川 敏明

◇事務局(市関係所属)

歴史まちづくり部副参事(文化財課長)	井伊 岳夫
彦根城博物館管理課長	堀部 圭一
産業部観光交流課長補佐	山本 武
産業部観光交流課誘客推進係長	川口 大輔
産業部観光交流課主査	松野 祐樹

第4 議題

- 1 彦根市観光振興計画 中間見直し案について
- 2 文化観光推進法に基づく地域計画の進捗状況について

第5 会議資料

資料1	彦根市文化観光推進協議会設置要綱・会議公開要領・委員名簿
資料2	意見の概要および市の考え方(彦根市観光振興計画(中間見直し版)(素案))
資料3	彦根市観光振興計画中間見直し案(素案)
資料4	彦根城・彦根城博物館を拠点とした文化観光推進地域計画_概要版
資料5	彦根城・彦根城博物館を拠点とした文化観光推進地域計画
資料6	計画目標の達成状況
資料7	地域文化観光推進事業の進捗状況

# 会議録

## 1 彦根市観光振興計画中間見直し案について

### ◆資料2・3に基づき事務局から説明

#### ○戸所委員

「新しい文化の創造…」に対する意見の内容が見当たらない。

#### ○事務局(観光交流課松野主査)

配布した資料(意見の概要および市の考え方)の5に記載している。

#### ○戸所委員

パブコメでいただいた貴重な意見だと思うが、あえて反映しないとされたのは、すでに記載があるからだと思うが、例えばそれに該当する「文化の創造」というのはどの項目に該当するのか。

#### ○事務局(観光交流課松野主査)

施策1(P28)のところで、「21世紀型城下町ならではの魅力ある観光コンテンツの創出」として記載している部分で読み取れるとしております。

#### ○戸所委員

この中で包括できているという判断だと思うが、パブコメに書かれている意見というのは、計画に記載の既存の文化や資源を積極的に活用しようという視点をベースにして、新たな文化の創造という視点を加えておくのが、これからの計画にはよいのではないか。茶の湯条例も含めて、単にこれまでのものを継承するというあり方ではない文化のあり方。具体的にどれを指すというものではないかもしれないが、議論は必要だと思う。そういった視点を持つということを記載しておくほうがよいと思った。既存のものを大切にするというそのベースは決して蔑ろにしてはいけないが、新しい文化のありかたをどう模索するか、そういう立ち位置みたいなものをどこかに明記する必要があるのではないか。

#### ○事務局(観光交流課松野主査)

その視点を盛り込んで記載を修正する。

#### ○上田洋平委員

「21世紀型城下町」という言葉はこの協議会で生まれたもの。既存のものを消費するだけでなく、新しい価値を生み出し続けていくということ。定義を作りながら、そのモデルを彦根で見せていく。世界に通用する国際的な普遍的価値への対応を考えながら、市民にも浸透するようなものにする。また、総がかりで取り組む必要がある。市民も事業書も一体となって、一人ひとりが自分事となるような指標を持つことも必要。

「20世紀型観光地からの脱却」と記載があるが、「20世紀型観光地」の説明がどこかにあるのか？

#### ○戸所委員

「21世紀型城下町」という表現よりも、彦根ならではの城下町を目指しているので、彦根固有のというニュアンスを持たれてはいいかがか。

○事務局（観光交流課山本）

元々の計画策定が平成 28 年度で 10 年間。今回が中間見直しで、最終年度が令和 7 年度。もうすぐ目の前に改定が迫っている。改定の際には、皆様がおっしゃってるようなご意見を、また会議を開催しながら、今後の 10 年を見据えて変えていきたいと考えている。今回の中間見直しは、建付け自体を大きく変更するのではなく、コロナもあったので目標値を重点的に見直した。今回いただいたご意見については、次の計画の時に反映したいと考えている。「21 世紀」という文言も含めて、彦根ならではの部分をアピールできる表現を検討・議論していきたい。

○上田洋平委員

茶の湯条例の策定に関わって感じるが、井伊直弼公の「一期一会」の考え方等は国際通用性のある思想。世界遺産登録が実現すれば、初めて日本を感じる場所が彦根になるかもしれない。初めての日本文化、日本人、お城になるかもしれない。彦根ならではの文化を考えながら、次期計画に向けて今回の計画を運用するのが大事なかなと思う。

○上田雄三郎会長

「21 世紀型城下町」というのを次の改定までにより深く考えていく。それが、いろいろな形で繋がっていくと面白い展開ができるのではないかな。

○戸所委員

実際は、今言われた「一期一会」みたいな、ある意味で普遍的な言葉ですが、今大切なのは「彦根での一期一会」とはどういうことが表現されていくと違いが明確になるとので、そのあたりを盛り込んでもらえるとありがたい。

○上田雄三郎会長

それでは、1 号議案については、一部修正することで、進めていくこととする。

## 2 文化観光推進法に基づく地域計画の進捗状況について

◆資料 4～7 に基づき事務局から説明

○戸所委員

博物館の入場者数は、コロナ禍の影響もあるかもしれないが、彦根城の入城者の 5 分の 1 程度の割合であるが、例えば令和元年度では彦根城の入城者が 84 万人だが、このときも同じ傾向か？

○事務局（博物館堀部課長）

令和元年度の入場者数の数字は持ち合わせていないが、大体の傾向として、彦根城の来城者の約 20%前後で推移している。お城の来城者の絶対数が増えれば増加する。博物館単独の来場者と彦根城の来城者を引き込むことが課題。展示など博物館が有している魅力を発信することで増やしていきたい。

○戸所委員

彦根らしい文化を感じ取ってもらうための博物館の役割は大きい。

彦根の良さを体験いただける。お城の来城者のせめて半分が来館されるといいかなと思うがそのあたりはいかがか。

○事務局（博物館堀部課長）

直虎展をしていた頃で入館者数が20万人近くあったと聞いている。令和4年度の速報値では9万6千人ほど。ここ数年でもコロナ禍を除くと約10万人前後で推移している。彦根城来城者の30～40%となれば、博物館の入館者数も十数万人になる。コロナの状況も落ち着いてきており、規制も緩和されてきたので、入館制限も必要ないということでこちらのほうもなんとかしていきたいと考えている。

○戸所委員

彦根の魅力発信という意味でも、ぜひ、3割、4割を目指していただきたい。

○上田雄三郎会長

どんなお客様が入館して、どんなお客様が入館していないのか、イメージがあるのか。

○事務局（博物館堀部課長）

館内アンケート等は取っているが、パーセンテージが少ないのでなかなか参考になりづらい。入館者の様子を見ると、高年齢の方、家族連れが多い印象。

○上田雄三郎会長

年齢の若い層向けの戦略が必要では。

○戸所委員

その視点が大切。ぜひ若い層への工夫を。甲冑など。

○事務局（博物館堀部課長）

やはり刀剣の展示は若年層が多い。「刀剣女子」も。展示計画については、収蔵品の6つの大きなテーマに即しながら、テーマ展、企画展、特別展を組み立てている。訴求力の強いものから、これまで焦点が当てられなかったものまで含めて、研究機関と展示とを高いレベルで釣り合わせていく必要があると考えている。

○上田洋平委員

「守る」と「活かす」、「遊ぶ」と「学ぶ」というバランスが博物館にはあると思う。やみくもに活用と言うだけではダメ。専門家だけではなく、アニメ業界など異分野の人に、この宝を見てもらったときにどういう反応を示して、どういう風に料理されるのか見たいのことを意見交換するところから新しいアイデアが生まれるのではないかな。本物を見てもらったことで、逆の波及効果、異分野の方のレベルアップにつながる、そんな価値がそこにあると思う。

データの分析等に関しても、彦根城のガイドの方の話を聞くと、数だけではなく質的なデータも持っておられる。そういったものを集めて、これは大学等が連携できることかもしれないが、AIのテキストマイニングみたいなところもあるので、日々体験されている経験の話の中からポイントを抽出できるのかなと思う。博物館にもう少し来ていただきたい。彦根全体としての連携をしていきたい。

米原市（旧山東町）のグランピング施設（1泊約3万円）で、最も利用しているのは、家族連れではなく学生。家族連れではとても泊まれないが、学生は自分のために使える可処分所得が最もある。少し視野を変えてみるのも重要ではないか。

指標に関して、レーダーチャートを活用したほうが見やすく良いのではないかな。

自然景観・街並みが満足度の上位になっている。しかし、その状況が崩れているのは少し危惧される。

また、文化庁の査定とは具体的な内実はどのようなことか。

○事務局（観光交流課山本）

観光分野では、コンテンツ自体の洗練は当然ながら、この PR に費用が掛けるのは当然という考えだが、文化庁の考えでは、良いものを作れば人は来るのだから、わざわざ広告をしなれば人が来ないようではだめだと。決して広告宣伝を否定しているわけではないが、それよりもまずは良いコンテンツを作りなさい、というのが文化庁の考え。広告・宣伝・周知・啓発にかかる費用は、基本的に補助対象にならない。私たちの考えとは相いれない部分がある。PR にある程度費用をかけないと効果がないので、そのあたりが難しい。

○上田洋平委員

コロナの中、満足度が上がっているが、どのように分析しているのか。

○事務局（観光交流課山本）

1 つは、観光客が最も多かった時期に比べ、絶対数が少ないので、渋滞や混在が減少し、観光客が旅行しやすいということはある。次に、コロナで制限されていたことが、徐々にとれてきて、これまで当たり前だったことがとてもありがたいと感じられていること、やっとなることができるようになったと感じていることをプラスに受け取っている。さらに、事業者のみなさんの努力の部分があるのではないかと考えている。

○事務局（OTB 内記さん）

満足度調査は OTB が実施した。いろんな要因があるが、例年の数値としてあてにできないと思っている。外部要因の影響が大きく、これまで行動制限がかかっていたのが、この年に一気に自由に行動できるようになったという落差による反動での影響が大きいのではと感じている。もちろん事業所の努力もあるが、見極めなければならないと感じている。

○上田洋平委員

当たり前だったことの落差に対応できる景観であり、街並みであり、もてなしであることは非常に重要なポイント。

○事務局（観光交流課山本）

コロナの影響があった上で、今回これだけ数値が上がっていることは、今までとはちょっと違う要素がある。高い数値を維持続けるのであれば、みなさまの努力のおかげと言えると思う。

○上田雄三郎会長

外国人の満足度調査は、令和 5 年度は実施する予定か。

○事務局（観光交流課山本）

実施する予定。

○事務局（OTB 内記さん）

計画としては実施予定。状況を見て判断となるが、現在でも外国人客は増えてきているので、秋からなら実施できると考えている。

○戸所委員

満足度が数値化できていて、それが高いからよいというだけにとどまらず、例えば、事業 3-2 の中で、昨年 10 月に博物館での夜のお茶会に参加したが、残念ながら満足度は低かった。現地へ行ってそこで体験するというレベルでは満足度はあるかもしれないが、せっかくそこで行うなら、お茶の嗜みをされる方がお点前をされるなど、そこに見合う満足度を上げ

ることが必大切。京都の高台寺では夜話を定期的で開催しているが予約がいっぱいでなかなか取れないという。本物の彦根の文化を味わえる体験できる機会をぜひ作っていただきたい。それが全体的な数値の向上につながると思うので検討いただきたい。

○上田雄三郎会長

本物の文化という観点では、彦根城博物館というのは、有力なコンテンツだと思うので期待感を含めてお話いただいている。

○久保委員

彦根城博物館の木造棟を茶の湯関連の方々が使用するのは OK か。

○事務局（博物館堀部課長）

貸館設備としては可能。一点難点があり、木造棟は有料観覧区域なので、完全に締め切ることはできない。お茶席を他の方が見るということや、貸切はできない。

○戸所委員

それは工夫次第ではないか。夜ならできるのでは。いくらでも協力する。

○事務局（博物館堀部課長）

正直、人の手配や施設の警備（24 時間）、お点前の先生など先立つものが必要になってくるので、なかなか難しい。

○戸所委員

できない理由はわかるが、どうすればできるかという工夫をしていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

○上田洋平委員

必要な人件費等を賄えるだけの参加費を設定したらどうか。

○久保委員

そういう商品を作ればいい。

○戸所委員

高台寺の例でも 5 千円くらい参加費を徴収している。それでもいっぱいになる。そこで得た満足度は大きな波及効果を生む。

○上田洋平委員

安売りしないほうがいい。

○事務局（堀部課長）

展示品の保護の部分などその観点からも難しいところはある。全く駄目だと言わないが実現可能な点を検討していきたい。

○上田洋平委員

ビオトープでも同じ。隠すビオトープと見せるビオトープをはっきり分けて使い分けている。

○上田雄三郎会長

最終的には手段の話ではなくて目的をどうするのか、やるのかやらないのか、なぜやるのか。そこをはっきりさせることが大切。

○内記委員

今後の地域の参画団体の位置付けというか、どのように動いていくのか役割分担など、参画団体への期待や改善点などがあれば教えて欲しい。

○事務局（博物館堀部課長）

博物館は行政職員と学芸員がおり、それぞれ展示・研究発表や施設の維持管理を行っている。しかし、誘客・プランニングの分野は得意ではない。そうした分野で、博物館に気軽にお話しいただくなど、そういった連携ができればと考えている。

観光振興計画の中間見直しについては、本日いただいたご意見の修正をしたうえで確定させていただく。文化観光法に基づく地域計画については、おおよそ計画通り進んでおり、いただいたご意見は次年度以降の事業に反映をしながら進めていく。